

# 「認知症あれこれ」!

意外と知らない



## それって、 本当に認知症？

平成24年の人口推計によると、65才以上の高齢者の総人口に占める割合は、過去最高の24.1%となり、当院に限らず、一般の病院でも高齢者の入院患者が増えています。手術後の安静が保てず、動いてしまったり、点滴やドレーンを抜いてしまったり、「大声を出す。介護を拒否する」などの異常行動がある、対応困難な高齢者に遭遇すると、つい「認知症だ!」と思ってしまいがちです。また認知症と言っても、そのタイプや病気の時期によって症状の現れ方は大きく異なり、ケアの方法も違ってきます。

例えば「アルツハイマー型」の認知症は、初期の場合は昔の出来事はしっかり覚えており、またその場を取りつくりうことが上手かったりするので、たまにしか会わない親戚の前では一見正常に見えたりします。

「レビー小体型」といわれる認知症では、記憶がしっかりしているのに、何かが見えたり、物がゆがんで見えるといった症状が不意に現れたり、薬の副作用がやたら強く現れるといった症状がでたりもします。また、同じように記憶は比較的しっかりしているのに、身なりがだらしなくなったり、やたら落ち着きがなくなり、時には万引きをして平然としているといった「前頭側頭型」と言われる認知症もあります。

認知症の他にも高齢になるに従って表に出てくる不安や、些細な身体の不具合を気にして依存的になったりする「神経症」や、いわゆる「うつ病」でも元々の性格や長らく続けてきた生活によって様々な症状が現れます。本人が訴える様々な症状に対する薬が次々と処方されることによって、次第に食欲が無くなって全身の機能が低下したり合併症が現れたりといったことも、まれではありません。

脳を中心とした中枢神経系が老化している高齢者は、病気にもなりやすく、ちょっとした発熱や身体の痛み、脱水、あるいは環境の変化にも上手く対応できず、生理的な反応から一見認知症のような「せん妄」と言われる異常行動や精神症状を示すことがあります。

例えば肺炎からの全身倦怠感や、治療に伴う自由度の制限による苦痛、将来が予測できないことによる不安、生真面目だったり神経質な性格から、馴れない環境や職員との関わりによる緊張の持続と混乱から、元々の頑固な性格がより強く出たりします。

そのような状態を認知症の症状として捉えて、認知症の薬が処方されると、かえって興奮が高まったり、落ち着かなくなったり、より対応が困難になる場合があるので注意が必要です。

また、一見認知症のような症状の背後に、おしっこが出にくくて膀胱がパンパンな状態だったり、ひどい便秘が続いていたり、痒みのために睡眠がとれていなかったり、もっと深刻な身体の病気が隠れていたりといったこともあります。

まずは、その方をよく知る、かかりつけ医に相談したり、その先生を通じて認知症に詳しい専門医に受診することをお勧めします。

